

通常学級に在籍する特別な支援を必要とする児童が居心地のよさを感じる学級集団づくり —学校グループワークトレーニング(GWT)の実践を通して—

所属校: 足立区立関原小学校

氏名: 前田 文子

派遣先: 早稲田大学教職大学院

キーワード : 特別支援教育, 学校グループワークトレーニング(GWT), 集団

I 研究の目的

1. はじめに

個の問題と集団づくりの問題とが切り離されて考えられがちであるが、集団を育てながら、個への可能な支援を考えることは、学級担任としての重要な役割である。

特別な支援を必要とする児童は、障害からくるさまざまな問題を示しているにもかかわらず、それが発達障害のためと気がつかれず、本人の性格や保護者の育て方の問題とされ、不適切な対応を受けやすく、本人の不応状態がさらに悪化する悪循環となりやすい(宮本 2000) という問題がある。学級の中の居心地を特別支援対象児がどのように感じているかについては、『学級生活の満足度は低く、学級集団への適応も良好ではないこと、特に特別支援対象児が複数在籍する学級では、その他の児童の学級集団への適応も良好ではない』(深沢・河村 2007) ことが示されている。つまり、「特別支援教育」実施にあたり、個別支援の充実ばかりが強調されるが、困難を抱える児童だけでなく他の児童も不満を抱えており、相互に作用しあって悪循環を引き起こしている可能性が考えられる。

本研究では、特別支援対象児の、認知的に強い特性を生かし、学級の一員として集団に取り込むGWTを実践することで、特別支援対象児の対人関係スキル獲得と、学級集団全体の成長をねらい、学級全体が居心地のよさを感じる学級集団づくりの研究を行う。

II 研究の方法

1. 研究の対象

都内公立小学校 4年 X組 (学級と対象児 A)

都内公立小学校 1年 Y組 (学級と対象児 B)

ここでは、紙面の関係上、1年生の実践のみ述べる。

2. 時期

平成 20 年 11 月～平成 21 年 2 月

① 調査 Q-U

学校生活における児童個々の意欲や満足感、学級集団の状態を質問紙によって測定するもの

3. 研究方法 (図1 構想図)

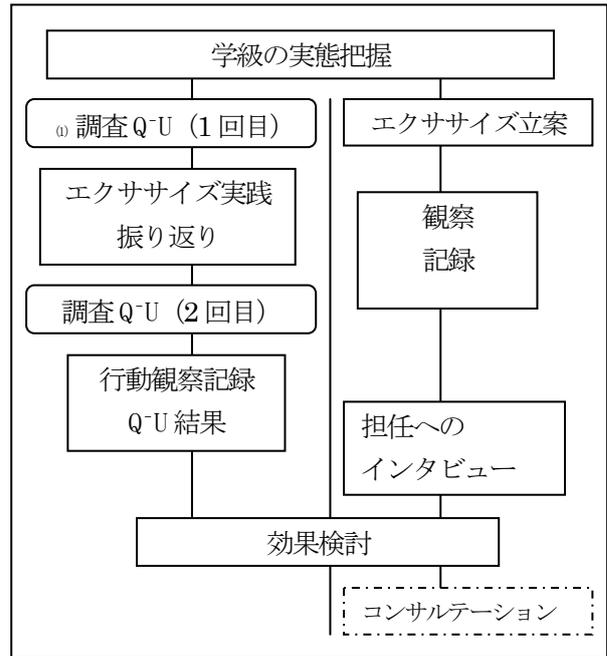


図1 構想図

QU データをさらに統計解析ソフトを用いて解析し、統計的検討を行った。

表1 実践エクササイズ

1	おたんじょうびおめでとう
2	人間カラーコピー
3	もじもじゲーム
4	もじもじゲーム：仲間あつめ
5	人間コピー：同じ形をつくろう編
6	むしむし教室の席替え
7	先生ばかりが住むマンション：Z小学校編

4. 指導仮説

視覚的理解が得意な B 児が参加しやすいように、その力を生かせるエクササイズを基本に、B 児の課題でもある物事の関係性をとらえるエクササイズを融合させる。B 児が友達に認められる場面を増やし、どうしても話さなければいけない場面を意図的に設定することにより、躊躇することなく、思いや考えを伝え合え

るようになるであろう。

また、言語のやりとりを制限して、相手の意を目で汲むエクササイズを通して、集団として他者理解が進み、よりまとまりのある学級集団になるであろう。

Ⅲ 結果

1. B 児の行動観察

7回のエクササイズを通して、同じグループの児童との距離が縮まったように感じられた。積極的に話しかけ、発言を躊躇する場面は減った。ある情報をグループの児童が言った際、「ぼく、その情報持っているよ」と言って情報を加えたり、「ねえねえ、もう一回言って」と複数の情報の関係を捉え直そうとして人に尋ねたりする姿がしばしば見られた。苦手だった、物事の関係性をとらえるスキルを獲得しつつあると考えられる。

2. GWT 実施後の Q-U 結果(B 児)

承認得点『10 点→15 点(↑)』被侵害得点『14 点→8 点(↑)』(注 ↑: 全国の傾向より望ましい方向にある)

学級生活不満足群から非承認群へと変化。GWT が効果的に作用したと言える。

3. GWT 実施後の Q-U 結果(集団)

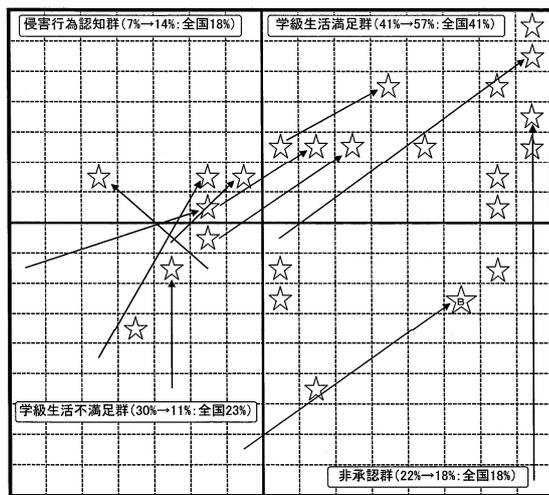


図2 GWT 実施後 Q-U 結果(平成 21 年 1 月 21 日)

表2 質問項目得点

得点	GWT 実施前		GWT 実施後		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
承認得点	17.33	3.853	18.85	2.931	-2.290*
非侵害得点	11.44	4.273	10.56	3.945	1.578
友達関係	9.96	1.808	10.44	1.649	-2.229*
学習意欲	10.63	1.523	10.33	1.617	1.189
学級の雰囲気	10.96	1.192	11.07	1.567	-0.648

(* t < .05)

対応のある t 検定で、GWT 実施前と実施後で、承認得点 (t=.03 < .05) と友達関係 (t=.035 < .05) に有意

差が見られた。学級全体としても、まとまりのある学級集団へと変化しつつあると考えられる。

4. 担任のインタビュー

GWT 実施後、B 児なりに自分でできることは頑張ろうと努力していたり、最後までやり遂げようとしたりする態度が見られるようになり、途中で諦めたり投げ出したりはしなくなったという。生活面でも、「これじゃなきゃだめ」「こうじゃなきゃ嫌」という自己主張が減り他者を意識して行動している様子が見えるという。

学級全体では、児童が周りを意識して行動するようになり、温かい言葉や優しい言葉に敏感になって、言われたほうも嬉しそうに受け取るし、また、そのような言葉を言えるようになってきたと担任は感じている。大縄大会に向けての練習では、跳べない子にアドバイスをし合う様子がたくさん見られ始めたという。

Ⅳ 考察

1 年生ということもあり、対象児だけでなく学級全体の発達段階からも、視覚的な強みを生かしたエクササイズが有効であったと言える。対象児は、周りから認められる心地よさを鼻歌・表情で表わし、目と目を合わせて、躊躇することなく同じ話題で話せるまでになった。周りの児童も、B 児に発言を促したり、B 児の発言を認めたりして、一人一人が「協力したら楽しい」と体得したように感じられた。

実態把握から、対象児の認知面の強みを生かしたエクササイズを行った。活動中、対象児の望ましい言動が増えたこと、Q-U 結果から望ましい学級集団へ変化したこと、活動から数週間後の担任のインタビューより対象児の言動に望ましい変化が見られたことから、設定したエクササイズが有効に作用したと言える。

GWT は、担任だからできる対象児の認知面の弱みと強みの的確な把握、強みを生かすエクササイズ、強みを生かした構造的な枠組みの振り返りシートの作成が可能である。そのことが、対象児の対人関係スキル獲得に有効に作用し、個の望ましい言動や対人関係能力を育成できるとともに、集団としての力動を高めるのに有効だと考えられる。

【参考文献・引用文献】

- (1) 学級満足度調査 (Q-U), 河村茂雄, 図書文化宮本信也, 2000, 通常学級にいる軽度発達障害児への理解と対応. 発達障害研究, 21 (4), 262-269
- 深沢和彦・河村茂雄, 2007, 通常学級に在籍する特別支援対象児童の学級適応について一困難領域の違いによる検討-. 日本教育心理学会総会発表論文集, 49, 515